

初めての担当馬がサラブレッド獣人で 規格外ちゃんぽで処女まんこを犯された  
獣人サラブレッド×カントボーイ調教師

体  
験  
版

第  
1話

パノラマの視野と、  
発情のにおい

獣人たちが競い合う公営レース。その裏側にある、広い専用の馬小屋にある特別個室――。

人間の新人調教師であるユウは、息を殺しながら、冷たいコンクリートの床を抜き足差し足で進んでいた。

（……っ、身体が、熱い……っ。でも、今日中にシュヴァルの機嫌を取っておかないと……）

ユウの額には、じつとりと脂汗が浮かんでいた。

月に一度、ユウの身体にだけ訪れる強烈な発情期。男なのに、ちんこを持たず、おまんこと子宮だけを持って生まれた、希少な体質——いわゆるカントボーイと呼ばれる存在だった。その股間からは、すでにドロドロに溶けた甘い愛液が溢れ出し、ズボンの下をぐっしりと濡らしている。薬で抑え込んだつもりだったが、熱はまったく引いていなかった。

部屋の中央には、つやのある黒い美しい髪と、筋骨たくましい肉体を持つサラブレッドの獣人——シュヴァルが、壁に向か

ってだるそうに立っていた。

競走界でもトップクラスの脚力と、手がつけられないほどの荒い気性を持つ種付け馬。ユウは彼を刺激しないよう、視界に入らない真後ろからそっと近づこうとした。

「……おい、人間。足音消して背後から近づいたつもりか？」

「ひっ!？」

シュヴァルが振り返りもせず、低い声を落とし、ユウはビクンッ!と肩を跳ねさせた。

「な、なんで……っ？おれ、まだ一言も……」

「ハッ、馬鹿な調教師だ。俺たち馬の目はな、顔の横についておかげで三百五十度ぐると見えてんだよ。お前がドアを開けてコソコソ這い寄ってくるマヌケな姿、端から全部丸見えだぜ」

「えっ……！？」

振り返ったシュヴァルの鋭い瞳が、獲物を捕らえるようにユウを射抜く。

シュヴァルはゆつくりとユウに近づくと、ふいにピタリと足を止め、顔を近づけて「スンツ」と深く息を吸い込んだ。

そして、奇妙な表情を作った。首を少し上に伸ばし、上の唇をグルンツとめくり上げて、歯を剥き出しにするような仕草をしたのだ。

「あ……っ、シュヴァル？ な、なにその顔……」

「……俺たち馬はな、強い匂いを嗅ぐと、上唇をめくり上げて鼻の奥の感覚器に直接空気を送り込むんだよ。発情のにおいを

嗅ぎ分けるための仕草だ」

「——ッ!？」

シユヴァルがニヤリと残酷な笑みを浮かべた。

「お前、男のくせにすげエ甘ったるい『発情したメス』の匂い撒き散らしてんぞ。しかも、股間からドロドロの愛液の匂いが、俺の鼻をガンガン刺激してきやがる」

「ち、ちがつ……!これは、病気でっ……!」

最大の秘密を、草食動物の鋭い嗅覚にあっさりと見抜かれ、ユウの頭の中が真っ白に弾け飛ぶ。

逃げなければ。人間の理性が警鐘を鳴らし、ユウはかかとを返してドアへ駆け出そうとした。

しかし、遅い。

「ひゃあッ!？」

ドンッ!!

圧倒的なサラブレッドの瞬発力。シュヴァルが一瞬で距離を詰め、ユウの身体を冷たいコンクリートの壁へと激しく押し付けた。

「や、やだっ！ 離してっ、シュヴァル……っ！」

「暴れるなよ、調教師。……お前が発情期を隠して俺の担当になった理由、この身体でたっぷり教えてもらおうか」

シュヴァルの大きな手が、ユウのズボンの上から股間をガツチリつかんだ。

「ひいッ！？だ、だめっ、そこはっ……！」

「ハッ、ズボンの上からでも分かるぜ。股間がぐっしより濡れて、俺の手のひらに熱が伝わってくる。……しかも、ちんこが付いてねェな」

「あっ……うう……っ、誰にも、言わないでっ……！」

ビリビリイッ！！

シュヴァルが強靱な腕力で、ユウのズボンと下着をあっさりと引き裂いた。

誰の目にも晒されたことのないピンク色の処女まんこが、冷たい空気に晒されてヒクヒクとだらしなく震える。

「すげエ……。人間でカントボーイって、こんなエロい形してんのか。匂いを嗅ぎ分けなくても、クリトリスがパンパンに充血して俺を誘ってんのが丸わかりだぜ」

「あゝっ♡ひんっ……。やっ、やだあっ……。見ないでっ、言葉にしないでっ♡」

シユヴアルの太い指先が、ユウの陰裂をツウツと縦になぞる。

「ひゃあッ！♡あっ、やだっ、指、やだっ……でもっ、あゝアッ！♡」

「口では嫌がりながら、お前のとろとろのまんこ、俺の指にすげエ勢いで愛液を擦り付けてんじゃねエか。素直なメスだなア」

グチユツ♡ズリユツ♡

シュヴァルの指が、充血して皮から顔を出している敏感なクリトリスを、ぐりっ♡と強めに押し潰した。

「んぎいいッ！♡だめっ、そこっ、そんな強くっ、あっ、あゝアッ！♡潰れちゃうっ♡」

「馬の脚力と腕力、舐めんなよ。お前のその熱で腫れ上がったクリちんぽ、根元から千切れる寸前まで捏ね回してやる」

クニクニッ♡ズジュウウッ！♡

人間の指では絶対に不可能な、強靱な握力による極限の部位責め。発情期で過敏になったユウの身体にとって、それは致死量を優に超える快感だった。

「いやっ、いやでしゅっ……でもっ、シュヴァルっ、クリちゃん潰されてっ、きもちいっ……んああっ！♡」

「ハッ、さっきまで調教師ぶってたクセに、もう壁に擦り寄って俺の手に腰振ってきてんじゃねエか。どんだけ俺の前戯が気に入ったんだよ、この淫乱な人間」

ズチュウウウツ！♡

シュヴァルのもう片方の指が、愛液でドロドロになったまんこの奥へとズチュン♡とねじ込まれ、奥のしこりをごりごり♡とえぐり上げた。

「んひいいッ！♡いぐっ、おれっ、調教師なのにつ、担当馬の指でっ、ナカと外を同時にいじられてっ、いぐううッ！♡♡」

両足をビクビクとけいれんさせ、ユウは大量の潮を噴き出しながら、人生で初めての強烈な絶頂を迎えた。

噴き出した熱い潮が、シュヴァルの手をドロドロに濡らす。

「……ハッ。人間のカントボーイまんこの愛液、すげえ美味い匂いだぜ。俺の鼻が完全に『発情したメス』だと認識しちまつた」

シュヴァルがゆっくりと自身のズボンのベルトに手を伸ばした。

「だが、俺たち馬の交尾は……こんな壁に押し付けたまま、立った姿勢でやるのが基本なんだわ」

「え……っ？ あゝ……！？」

立ち交尾の絶望と、未知なる雄の質量への期待に、ユウの小さな子宮がきゅん♡と切なく鳴った――。

# 体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。

選択も、関係も、そして——結果も。

知らないまままで終わるか、

それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。